元甲子園球児 初出場で6位

やり投げ 高橋選手

【パリ＝下條大樹】3日にあったパリ・パラリンピック陸上やり投げ（上肢障害F46）で、高橋峻也選手(26)＝トヨタ自動車、日本福祉大卒＝が6位入賞した。「初めてのパラリンピックでも力を発揮できた」と前向きに捉えた。

男子やり投げ（上肢障害F46）で3投目を投げる高橋峻也選手＝3日、パリ郊外で（共同）

6回投げ、最も遠くに投げた距離が記録となる。高橋選手は1回目に59・28㍍を出し、手をたたいて喜んだ。3回目に59・76㍍に更新するが、すでに上位勢が60㍍超で競い合う展開。そのまま記録を伸ばせず、世界の壁も感じた。

鳥取県米子市生まれ。3歳の時に患った脊髄炎で右腕が動かしにくくなった。父親の誘いで野球を始め、左手で球を捕ってすぐにグラブを外して左手で送球する「グラブスイッチ」を習得。高校で野球部に入り、3年夏には甲子園でベンチ入りした。その奮闘を知った日福大の陸上部監督からスカウトされ、同大入学後から陸上に転向。2022年のジャパンパラ大会では61・24㍍の日本記録を打ち立てた。

父・正樹さん(55)の口癖は「健常者の10倍、努力しろ」。その言葉を胸に、練習に取り組んできた。「継続は力なり」と刺しゅうされた高校時代のグラブが宝物で、パリにも持参し、選手村のベッドの横に置いている。

甲子園での経験から自分では大歓声に慣れていると思っていたが、「パラリンピックは比べものにならないくらい大きかった」。その中でものまれることなく、競技に集中できた。

次回のロサンゼルス大会の時には30歳。技術と筋力が成熟する時だ。「4年間を無駄にせずに、しっかり技術修正していきたい」と意気込んだ。

（許諾番号:20240905-31293）